読者のページ

横浜市内の池の調査

公害対策局　石井ちず子

横浜らしさのひとつに『谷戸景観』がある。その谷戸の小川には、現在でもホタルがひっそりと生息し、また、谷戸にある池には、魚を始め、エビ、カメ等が生息し、ギンヤンマなどがまだみられている。

都市生活者にとっての水辺は、自然を感じさせる最も身近なものであり、都市にあるからこそ、どんな小さな自然、ありふれた自然でも、保全を基本に考えてゆくべきであろう。

このたび私どもの水質課で市内の池の調査を行なったのも『池』を海や川と同様な水辺として位置づけ、市民の求める身近な自然の保全・創造・回復を図る基点として考えてゆくためである。

一般に『池』とよばれているものを使われ方、所在等によって仮に分けてみると、(1)溜池、(2)公園等の池、(3)その他（釣り堀等）の池、等になろう。管理や所有形態からみると、公・私の区別がある。利用面からみると、水利権のある地元の団体によって利用・管理されているものもあり、また、防火用水として火災に備えられているものもある。市民の利用の面からみると、高い金網が張り巡らされて水辺に近づけないところもある一方、市民の森の池のように、管理されながらも積極的に市民に開放されているものもある。これらの池の総数は正確には把握できていないが、(1)については約三〇、(2)は一般公園七一から池・水の広場を数えると、一〇、といったところである。

こうした現況や調査をふまえ、今後の市内環境の保全基点として池を位置づけ、種々の開発計画に対しても保全を呼びかけてゆきたい。

公共施設の名称について

衛生局　大野敏美

本市における人口の急激な増加も漸く峠を越し、他の大都市に比べ大きく立ち遅れていた各種公共施設も数多く計画され、設置されて来ている。

ところで、これは本市の公共的な施設に限ったことではないが、近年設置された施設には、非常に多く「何々センター」という名称のものを見かける。いや施設ばかりでなく、団体名、法人名にも「センター」という語が使われており、この単語はちょっとしたブームとなっている感がある。

確かに「センター」という語は新鮮であり、洗練されているような心地好い響きを持っており、市民にとっても覚え易いと同時に、自然に口に出し易い単語である。

しかしながら、施設の規模、あるいは用途を問わず、画一的に「何々センター」とするのは安易な名称の付け方とは言えないであろうか。

というのは、いままでの公共施設には、その名称の下に添える語がいくつもあり（例えば、園、院、所、場etc.）、しかもそれらの単語にはそれぞれニュアンスの違いがあって、その語だけでも施設の規模や用途がイメージとして浮んできたものである。

「センター」という単語からは、このようなニュアンスは伝わりにくく、しかも施設名に役割、用途を表わす語を使用することが多いことから、どうしても名称が長くなってしまうきらいがある。そして、何よりもこれほど多く使用されると、この語自体が持つ新鮮な響きも薄れてしまうのではなかろうか。

施設の名称を決定する際は、充分な研究と検討が必要と思われるものである。

●訂正―70号10頁筆者名條塚昭民次氏は篠塚昭次氏の誤りです▽71号76頁五月二十八日の項、副議長に川俣清一氏選出は川俣勝一氏の誤りです。訂正してお詫びします。

〈**あとがき**〉当然ながら婦人問題はあらゆる分野にまたがる。分野ごとの特集も可能であろうが、今回は第一回という感じでどんな問題があり、動きがあり活動している地域の婦人はどんなことを考え、感じているかをそれこそ、ところどころの分野から取りあげた。視点を絞っての特集、欠けている分野の特集も必要と思っている。

取材していて、特集の中でも述べられているが、結局はどれだけ多くの女性が自分のこととして婦人問題といわれるものを実感するかが決め手と感じた。社会、経済、男性の変化が何となく外からやってきて良くなっていくということはありえないのではないだろうか。〈富永〉

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一―二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。